

小山靖憲・佐藤和彦 編：

『絵図にみる荘園の世界』

東京大学出版会 1987年6月

B5判 182ページ 2,500円

地理学では人文主義地理学，歴史学では社会史の興隆に伴い，生活世界の真相を多面的に描きだそうとする研究が増えている。その素材として近年，絵図・絵画史料が注目されてきた。本書は，西岡虎之助以来の荘園絵図研究史の流れを受け継ぎ前進させるものと位置づけようとするとともに，このような動向を物語る一例でもある。さらにまた，7人の執筆者が荘園絵図・差図・都市図屏風の解説を通じて，荘園とその周辺世界を活写する。それゆえ本書を，歴史学や歴史地理学にとっての絵図の研究可能性を模索した試論集として読むこともできよう。

本書は次の章から成っている。

- ・はしがき
- ・荘園絵図へのいざない——荘園制と絵図をめぐる対話（小山靖憲）
- ・荘園の四至と勝示——紀伊国杵田荘絵図（木村茂光）
- ・地方寺院の中世的展開——讃岐国善通寺近傍絵図（高橋昌明）
- ・領主の争いと荘園の分割——薩摩国伊作荘日置北郷下地中分絵図（黒田日出男）
- ・山間の流浪と定住——近江国葛川相論絵図（佐藤和彦）
- ・荘園村落の開発と景観——和泉国日根野村絵図（小山靖憲）
- ・中世農業と水論——八条朱雀田地差図・桂川用水差図（黒田日出男）
- ・都市図の機能と風景——『上杉本洛中洛外屏風』（黒田絃一郎）
- ・中世絵図読解の視角（吉田敏弘）
- ・荘園絵図関係文献目録（小山・木村・佐藤）

「はしがき」によれば，木村論文から黒田日出男第2論文までの6論文で，荘園制の発展段階に照応する絵図を通じて荘園史の概要が把握できる。黒田絃一郎論文は，荘園絵図とそれ以外の絵画史料の関係の考察と，荘園以外の世界の描写の例示として所収されている。吉田論文は，上述の歴史学者による個別絵図等の分析と異なり，絵図研究の学際的交流

を深めるために，歴史地理学の分野からの方法論的論考として所収されている。

このように本書は，一方では稲垣泰彦編『荘園の世界』（1973）の続編たる荘園史入門書としての体裁を採り，他方では上述したように絵画史料，とりわけ荘園絵図の解説試論集の性格をもつ。

各章の概説とコメントに移ろう。

「荘園絵図へのいざない」は，本書の序章ないし総論にあたる。荘園絵図の分類，研究史，歴史学と歴史地理学の絵図研究法の特徴と関係，研究上での現地保存と大版カラー図録の必要性などを論じている。しかし，対話形式の文章も禍して，十分な総論たりえていない。総論としては本来次のものが必要であろう。広義に荘園絵図と称しうる150点前後の絵図群または12世紀以降14世紀半ばまでの典型的な狭義荘園絵図群の年表と，本書で扱う絵図の確認，絵図の表現特性と荘園制の発展段階との対応の分類学的検討，周辺絵画史料の概説などである。それがあれば以下の各論研究の理解も容易になったと思われる。なお，小山『中世村落と荘園絵図』（1987）の第8章「荘園絵図の史料学」は本章をベースとし，よりまとまった論を展開している。

木村論文は，代表的な四至勝示図（領域型荘園の立券時に作成）である杵田荘絵図（神護寺蔵）をとりあげて，長寛2年（1164）頃蓮華王院領としての立券に際しての作成と推定している。また，南勝示を長享2，3年（1464，65）頃の後筆とみなす。氏の説は通説と異なる。通説は寿永2年（1182）または元暦2年（1184）の神護寺領としての立券時の作成で，南勝示は当初から描かれていたとする。したがって，第1の問題点として，氏の説の妥当性を検討ねせばならない。

次に氏は，本絵図を，実際よりも耕地を拡げ氾濫原をも荘域内に囲い込もうと意図した絵図とみなし，その原因を隣荘との相論に求めた。さらに現存四至勝示図が，形態としては四至勝示図的であっても，要因や目的としては相論絵図的要素を含みこんで作成された，と結論づけた。第2の問題点として，このような氏の理解は妥当であろうか。

まず第1の問題点に関しては，氏の力説にもかかわらず，通説の妥当性が高い。作成の時期・目的に関する氏の推定の根拠は，隣荘茨田荘が相論過程で

「古河以南嶋島」を放棄し「大河当時流北際岸」を北境と決定した長寛2年に、柿田荘が蓮華王院領として立券された点にある。しかし、「大河当時流北際岸」は寿永2年の神護寺領としての立券時にも踏襲されている。それに何よりも、本絵図は神護寺に伝来されており、文覚起請文の記述や絵図裏書も神護寺領としての柿田荘絵図にのみ言及している。氏の説の可能性自体が否定されるわけではない（蓮華王院から神護寺への絵図の伝蔵）が、通説に従うのが妥当であろう。

南勝示に関する文書上の疑問は、氏の説のとおりかもしれない。しかし、絵図における井桁状の耕地、段丘を想起させる線と樹林列が、南勝示の記載をもふくめて全体として荘域内表現されているのは明らかである。したがって絵図表現から、明らかに当初よりの記載である。なお文書上の疑問については、小山前掲書の第9章「柿田荘絵図と界相論」で解釈を試みている。

次に第2の問題点については、柿田荘絵図に氏の説の如き意図を読むことは困難である。家屋群や大道の描写を、地形図の表現の如く正確に対応物が位置するかのように扱い、その現地比定結果に作成目的をもとめる解読方法、堂記号の「縁付きの大きな家屋」との誤読など、絵図自体の考察の問題点も多い。12世紀の開発の進展が作成目的に関係するはずだとの氏の信念が、文書史料の分析に合致した無理な解読を生んだといえよう。「嶋島」の解釈も同様である。したがって、本絵図に対する氏の解釈、およびそれを前提とした氏の四至勝示図に対する理解は支持できない。

高橋論文は、次のように要約できる。①善通寺と寺領の歴史的展開の概説、②絵図記載内容の基礎的検討（裏書・寸法・描法・図像の筆致・視角・文字・情報量の検討、現地比定、絵師による編集の検討）、③伽藍堂塔の同定と家屋主の職層分類や耕地の所属（寺領を充填する要素の分析）、④田畑・年荒の比率や灌漑用水源などの土地条件と、年貢運用実態など政治経済状況の説明、以上をふまえ、⑤徳治2年（1307）聖地善通寺とその御百姓のため本免を本所随心院に請願した際に持参した、と結論した。

②③で絵図、①④で文書が主に分析され、⑤の結論は、絵図裏書と文書に多くを負っている。絵図の主題が左方にあるとみなし、三条七里三五坪の葉のない樹木と三条八里の人名等の注記を年荒・常荒地

の表現と解釈する。このような氏の分析と理解に対し、次の疑問点がある。

本絵図の左右両端の料紙はそれ以外の料紙と法量が異なる（左端料紙は右端料紙の半折）。また「南」方位文字が画面中央にない。しかし、左右両端の料紙を除くと「南」は画面中央になる。したがって、本絵図はまず左右両端を除く部分として作成され、次いで両端が付加された可能性をもつ。この点は、氏を代表者とする科研報告書『荘園絵図の史料学および解読に関する総合的研究』にも掲載されており、本絵図の性格を考察する上で極めて重要と思われるが、本論考では言及されていない。

左端料紙には、2つの池（湧水）とそこからの用水網が描かれている。したがって、用水に関する描写と用水以外の描写とは一応区別して扱うべきであろう。しかし、主題に関して氏は、両者をあわせて考察しているとともに、一方では葉のない樹木と用水路の交差を無視して枯れ松との判断をしている。料紙付加の可能性からも、一層慎重な解読が必要である。また、葉のない樹木は同坪内の特異な形態の三在家とセットで検討すべきではなからうか。

次に、右端料紙には寺領境界のランドマークをなす建物などが描かれており、一円領表現のための付加の可能性を窺わせる。山稜・田地が領域内部を分節化する描法が、氏の言う絵師によるスケッチの編集という技法上の編集なのか、一円領内の意味空間への分節化であるのか、さらに検討の余地がある。

両端料紙を除く部分には、④で氏が詳細に検討したように寺領支配に関わるデータが盛り込まれている。ただし、氏は、定規を用いた方格地割部分の精度が高いという。しかし、実際と相似形の方格線故に一定の縮尺と距離精度が得られるものの、それは絵図自体や記載項目の精度の高さを意味するのではない。両者の混同は従来から多くの研究にみられる。

以上のように性格の異なる部分を接合して、一応大師の聖地としての一円領に纏めあげることで本絵図は成立している。本絵図が社会的に担った機能としては氏の結論も含まれるかもしれないが、描写内容は決してそれに収斂するものではないことを確認しておきたい。

黒田日出男第1論文は、まず、①相論と和与の歴史的展開を概説する。次に、従来の諸研究が中分線の現地比定に拘泥するあまり絵図自体の検討が不十分であったとして、②絵図の検討（構図・作成プロ

セス・線記号と面記号、中分線をめぐる絵図記載内容)を行う。さらに、③従来の現地比定案2種類の検討と自身の現地比定案の提示を行っている。

本論文の特色は②にある。その中で氏は、絵図が和与状作成に先だって作られ、領家・地頭双方による中分線確定の図上作業に利用された後、合意した中分線が朱で引かれ、裏書で最終的に固定された、と推測した。そして、可能性のあった中分線を、絵図中の文字の向き、片仮名地名、道の分析から2種類指摘し、実際には2種類が調整されて朱線の如く決定されたと解釈した。

問題点や疑問点を述べよう。まず、②の説が文章で示されるのみでわかりにくい。さらに最も基本的には、氏の推測自体が成りたつか疑問である。つまり、そもそも現地を熟知する双方がデフォルメの強い本絵図をつきあわせて中分線を決定する必要があるだろうか。この点について氏は全く触れていない。

可能性としての中分線の考察についても疑問がある。文字の向きについては「吉利」と「吉富」の2大別でおおよそ説明がつく。氏の5大別と記載順序に関する説明には、必ずしも客観的妥当性がない。片仮名地名の記載箇所には中分線の可能性があったと氏自身言いながら、氏の分析結果は必ずしもそうはなっていない。本図の片仮名地名は、単に在地での一般的な呼称地名とみなすべきであろう。

以上から明らかなように、従来の諸研究が「中分線の現地比定」に拘泥しすぎているのと同様、氏の論考は「可能性としての中分線」に拘泥しすぎている。むしろ、下司園・公文園・上家分・寺園などの所有者と下地中分線による境界との錯綜、田畠園以外の山野河海への下地中分の貫徹度、所有者名・地名・地名の頻出理由、当時のこの一帯の土地利用や社会経済状況などについて、絵図からもっと考察すべきではなかったらうか。

佐藤論文の要約は次の通り。堺相論図としての葛川簡略絵図(下立山絵図)と葛川彩色絵図(葛川絵図)の成立過程・作成時期・記載内容の検討、文書史料を主に用いての相論の展開過程・惣的結合の考察、相論図研究に際しての留意点。

本論文は、木村～小山の5論文のうちで最も、絵図作成目的よりも、「絵図に表現された小宇宙」の住民の「生活空間の認識」および「中世民衆の生活・生産そして闘争の諸相」を解説することに焦点をあてている。また、次の小山論文とともに研究史上

の成果が明確に示されている。ただし、絵図そのものの分析と文書史料による相論や村落結束の経緯説明とが遊離しているとともに、自らの絵図分析に乏しい。葛川絵図の成立過程について、台形部分や追筆の問題も含めて、より詳細に葛川一帯の生活空間の展開と関連させて述べてもらいたかった。

小山論文の要約は次の通り。①日根野村・日根荘の歴史的展開と研究史、②日根野村絵図と日根野村近隣絵図の作成時期・作成目的・記載内容(裏書・文字注記、図法と構図、景観描写、空間表現)の概説、③荒野開発に関連する絵図記載内容の分析、④日根野台地開発に関連する絵図記載内容の分析、⑤荘園村落の開発の諸相を諸絵図により例示。

氏は研究史をふまえつつ、従来十分に解明されていなかった絵図作成目的を、旧来の荘務権を維持しようとする領家が、「寺内荒野」の設立などによって本家の荒野開発を最小限にとどめようとした点に求めた。③④におけるその分析は、絵図細部までを解読し、かつ有機的にそれらを関係づけており説得的である。また、④⑤において、当地および各地の開発を絵図の記載に即して解説している。

次に疑問点を述べよう。(a)異筆に対する氏の指摘によれば、本絵図の作成目的と直結する重要箇所文字注記が「異筆1」になってしまう。また「異筆2」は指摘にとどまる。(b)文暦元年(1234)日根野荘諸村田畠在家等注文案に「井川」の記載がないことから、当時における「井川」の未成立と文暦元年以降正和5年(1316)までの開削、大井関神社と溝口社が上之郷の灌漑を加護する神社、と推測する。しかし、これらについて一層の検討が必要であろう。

以上の5論文は、絵図表現上、狭義の荘園絵図に属する絵図から、領域型荘園の成立と展開、下地中分、堺相論、荘園村落の開発の進展という荘園の発展段階に即応する絵図をとりあげ、その分析により各発展段階の荘園の実相を明らかにする。1枚の絵図を主に分析し、黒田論文以外では、そのあと同種の荘園絵図により当該段階の荘園一般の状況についても概説している。単に絵図の作成目的にとどまらず、これらのまさに『絵図にみる荘園の世界』のタイトルにふさわしい論考としては、5論文のうち小山論文が最も成功している。小山の扱った絵図群が最も荘園村落の内部に関する記載が豊富で、このようなアプローチに最も適的なこともその一因に挙げられよう。

黒田日出男第2論文は差図を扱っている。要約は次の通り。①差図を、屋敷や田地の差図（売券付属図）、用水差図、狭義荘園絵図と機能の類似する図に3分類し、土帳や坪付図を差図に近いものとする。②田地差図から、13世紀半ばの京都の農業に関する情報（肥料・農法・耕地条件）を抽出している。③桂川の3用水差図を例に、記載内容が含んでいる用水相論上の機能を解説している。特に「桂川用水差図」の作成に関して、より厳密な考証を行い、また「桂川井手取水口差図」が東西の井手の上下流関係を作した図と結論する。

②の分析は、図ではなく文字への注目に終始する。史料学的には必要であろうが、特に絵図分析とは言えない。③では、特に「井手取水口差図」に関する結論が、相論的機能を求めるあまりの誤読ではなからうか。

このほか氏は、「差図こそ中世後期の荘園絵図を代表するもの」、「差図抜きに荘園絵図の世界を語ることは著しくバランスを欠く」と述べている。しかし、②は荘園絵図でない。③にも狭義荘園絵図の一般図的性格はなく、用水に限定された主題図といわざるをえない。

黒田絏一郎論文は、本書の題名とは乖離しているが、その点はここでは問わない。要約は次の通り。

①他の洛中洛外屏風と比較した場合の「上杉本」の特色（じか書きの多数の文字注記、多くの登場人物、描写のリアリズム）、②景観要素（川、橋、街路など）の表現方法は平均斜度60°で順勝手の俯瞰法を採用し、当時の都市状況を詳細に活写、③色と対象事物との対応関係、④ずし、特に文字注記をもつ島山ずしに代表される描写事項の正確さと、文書史料とのつきあわせによる時代考証、⑤3人の医者の描写に潜む都市民および絵師の日常関心の所在と、描写されている人物の考証、⑥一双の洛中洛外屏風というモチーフの成立条件（画題についての統一と集合の論理の存在、洛中洛外を一体の生活空間とみなす意識の成立）に関する考察。

氏は、文字注記の事項別・扇別の分類、屏風記載内容の平面図、六曲一双のトレース図、主要描写地点の現地比定図という詳細な図表を作成し、個々の図像をできる限り地図のレベルで解釈する。一方で、文書から図像の景観要素や人物の詳細な補足説明をする。「上杉本」を全体として読みとおす論理の模索に主眼があり、金雲と俯瞰法という大和絵の技法

がそのような論理の表現技法として採用されたことを述べる以上には、論理そのものは解明されていない。

氏の問題設定は斬新であり、地図のレベルで解釈する分析方法も高く評価できる。しかし、②③⑤は時として冗長の感を与え、文書の博搜も目につく。また、論旨が時として分散し、絵図に収斂しない。たとえば、「島山ずし」およびずし一般に関連して都市開発を詳述するのは、「上杉本」の論理追求からはずれる。医師に関する詳述も過度に思う。これら個別の記載内容を正しく理解することはもちろん必要であるけれど、それとともに、じか書きの文字注記の内容（表1）を整理だけでなく分析し、また六曲一双の四季屏風上における図像や文字注記の配置（図1）を構図分析することが、「上杉本」の全体構造を解説する上で重要であろう。

吉田論文は、以上の日本中世史家による個別絵画史料の解説をはなれ、絵図の特質、それをふまえた上で読解上必要な立場、絵図全体の形成原理や表現構造に関する考察を行っている。要約は次の通り。

①絵図はスケッチマップであり、特定の完結的な領域の全体を構造化して表現する。絵図の解説は、絵図全体の形成原理や表現構造に即して行わねばならない。

②絵図中の意味内容を絵図外資料から得た作成目的に短絡させて解釈する「作成目的からのアプローチ」を、絵図形成原理や表現構造に即さないと批判する。さらに富田荘絵図を事例に、意味内容の分析結果が次々に有機的に結合して作成目的に還元される「作成目的へのアプローチ」と「作成目的からのアプローチ」との違いを明確化する。

③四至勝示絵図、荘園村落を描く荘園絵図、社寺境内絵図の3タイプの絵図の形成原理や表現構造を分析する。特に四至勝示絵図に関して、「表現の重点が四至や勝示の境界におかれ、荘域内部の表現にはほとんど構造が検出できない」、「荘域内部の歪みは必ずしも意図的ではないとみられるのであって、むしろこの点に四至勝示絵図の特質が求められる」と述べる点は、木村論文と正反対の考えといえよう。

①～③は主旨妥当であろう。ただ、絵図全体の形成原理や表現構造に関して、疑問点がある。第1点は、絵図群の分類体系を地図機能に即した構造の観点から整理する場合、四至勝示絵図や社寺境内絵図と、荘域内部を詳描した絵図（富田荘絵図や骨寺村

絵図Aなど)とを、同列に扱えるか否かについてである。後者の構造は個別のヴァリエーションが高いし、通絵図の特性と個別の特性との重層性の問題もある。

第2点には、絵図全体の形成原理や表現構造を分析する視角が多様に存在する、と氏は言う。しかし、地図としての特性ゆえに「地域像」という視角で絵図全体を分析することはたしかに可能であろうけれど、このような視角を数多く提示することは困難ではなからうか。また、中世絵図の特色をふまえて、「地域像」以外の具体的視角をさらに提示してもらいたかった。

以上、細部にちちいたって要約とコメントを行ってきた。荘園絵図に関する従来の書物で、絵図そのものの解説にこれほどこだわった書物はほとんどなく、それゆえ、このようなコメントの仕方が必要と感じたからである。

歴史学と地理学では、学問の違いから、前者では史料学、後者では広く地図学とりわけ地理思想史の立場から絵図を扱う、とよく言う。しかし、この場合の史料学とは、絵図自体を史料として徹底的に扱い、籠められた情報を体系的に抽出するということであろう。したがって、地理学と大きく異なるものとは思えない。本書は史料としての扱い方、解説の手続きを明示しつつ、多様な情報を抽出することを模索しており、それゆえ、多くの人々に対して、絵図への興味を喚起するにちがいない。しかしながら、全体の成果が示すように、必ずしも十全といえない部分の多いこともたしかである。本書をふまえて私たちが最も気をつけねばならないのは、絵図を恣意的に操作してその研究素材としての価値をおとしめることなく、絵図の語りかけるところにすなおに耳を傾けることであろう。

〔付記〕

本書の執筆者3名(小山, 高橋, 吉田)も出席して昨年11月7日に葛川絵図研究会例会において合評会が行なわれたことを付記させていただきます。

(松尾容孝)

長野 覺 著:

『英彦山修験道の歴史地理学的研究』

名著出版 1987年10月

A5判 512ページ 9,700円

30余年にもわたって英彦山に取り組んできた長野氏の研究が、一書にまとめられた。本書『英彦山修験道の歴史地理学的研究』がそれであり、著者が駒沢大学に提出した学位論文を骨子としたものである。本書の構成は、次のようになっている。

- ・緒論
- ・第1章 英彦山史の概要
- ・第2章 英彦山修験道成立の宗教的背景
- ・第3章 修験道の入峰と峰入り道
- ・第4章 英彦山修験道の組織と秩序
- ・第5章 英彦山修験道の経済的基盤
- ・第6章 英彦山修験道集落の実態

まず緒論では、本書の研究上の位置づけと、各章の主な内容が簡単に述べられている。著者によれば、修験道の三大拠点である大峰山・羽黒山・英彦山の中で、英彦山は他の2山に比べて修験道の実態は不明の部分が多く、古文書の検証と実地検証法によって、神仏分離前における英彦山修験道の復原的研究を行なったという(3~4頁)。

第1章では、古代から現代に至る英彦山の歴史が概観される。

第2章では、英彦山修験道成立の宗教的背景(神体山・天台霊山としての彦山)と、入峰・山伏三派(惣方, 衆徒方, 行者方)の成立に触れている。

第3章では、前半で大峰山など全国の霊山における修験道の入峰と峰入り道を展望し、後半で英彦山のそれについて、入峰集団構成(大先達, 新客, 同行, 度衆)も含めて詳述している。

第4章では、英彦山修験道というよりも英彦山の自治組織(座主, 座主代, 役僧, 検使, 典医など)と、式目・法度に見られる社会秩序が述べられている。

第5章には、彦山の領域・石高, 師檀関係, 信仰圏, 檀那の英彦山参詣, 山伏の経済生活など, 幅広い内容が盛り込まれている。

第6章では、英彦山の構成戸(坊家, 院家, 庵室, 俗家)や構成者(隠居, 当住, 庵室山伏, 弟子, 同宿)について、また修験道集落の衰退とその要因について述べている。

以上簡単に紹介したように、本書は「歴史地理学